

物理学入門 第11回 電位と電気容量

2020年7月24日 担当：佐藤 純

問題 1 x 軸原点に電荷 q がある。

- (1-1) テスト電荷 q_t を, $x = a$ から $x = b$ まで運ぶのに必要な仕事 $W(a \rightarrow b)$ を求めよ。ただし, $0 < b < a$ とする。

クーロン力 $\frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0 x^2}$ に逆らって人間が加えなければならない力は, $-\frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0 x^2}$ である。したがって,

$$W(a \rightarrow b) = \int_a^b -\frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0 x^2} dx = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0} \left[\frac{1}{x} \right]_a^b = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{b} - \frac{1}{a} \right)$$

- (1-2) このとき, テスト電荷は仕事 W をされることによって, ポテンシャルエネルギーを蓄える。位置 x におけるポテンシャルエネルギーを $U(x)$ とするとき, $U(b) - U(a)$ を求めよ。

仕事をしてもらったことによって獲得したポテンシャルエネルギーは,

$$U(b) - U(a) = W(a \rightarrow b) = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{b} - \frac{1}{a} \right)$$

である。

- (1-3) ポテンシャルの基準点を $x = a$ に選ぶ。すなわち, $U(a) = 0$ とする。このとき, 位置 x におけるポテンシャルエネルギー $U(x)$ を求めよ。

上式に $U(a) = 0$ を代入して,

$$U(b) = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{b} - \frac{1}{a} \right)$$

を得る。ここで, b を x に書き換えて,

$$U(x) = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{x} - \frac{1}{a} \right)$$

を得る。

- (1-4) ポテンシャルの基準点を無限遠点 $x = \infty$ に選んだときの, 位置 x におけるポテンシャルエネルギー $U(x)$ を求めよ。

$$\lim_{a \rightarrow \infty} \frac{1}{a} = 0$$

より,

$$U(x) = \frac{qq_t}{4\pi\epsilon_0 x}$$

を得る。

- (1-5) 前問で求めたポテンシャルエネルギーを, テスト電荷 q_t で割ったもの $\phi(x) = U(x)/q_t$ を“電位”と呼ぶ。原点の電荷 q が位置 x に作る電位 $\phi(x)$ を求めよ。

$$\phi(x) = \frac{q}{4\pi\epsilon_0 x}$$

を得る.

(1-6) 位置 x における電場 $E(x)$ は, 電位 $\phi(x)$ を微分することによって

$$E(x) = -\phi'(x)$$

と書けることを確認せよ.

$$-\phi'(x) = -\left(\frac{q}{4\pi\epsilon_0 x}\right)' = \frac{q}{4\pi\epsilon_0 x^2} = E(x)$$

(1-7) 同様にして, 3次元の場合には, \vec{r} の位置における電位 $\phi(\vec{r})$ は

$$\phi(\vec{r}) = \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r}$$

と書ける. ただし, $r = |\vec{r}|$ は原点からの距離を表す.

\vec{r} の位置における電場 $\vec{E}(\vec{r})$ は

$$\vec{E}(\vec{r}) = -\vec{\nabla}\phi$$

と書けることを示せ. ただし,

$$\vec{\nabla} = \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{pmatrix}, \quad \vec{\nabla}\phi = \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{pmatrix} \phi = \begin{pmatrix} \frac{\partial\phi}{\partial x} \\ \frac{\partial\phi}{\partial y} \\ \frac{\partial\phi}{\partial z} \end{pmatrix}$$

である.

$\vec{r} = (x, y, z)$, $r = |\vec{r}| = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$ とする.

まず, 以下の微分式が成り立つことに注意.

$$\begin{aligned} \frac{\partial r}{\partial x} &= \frac{\partial}{\partial x} \sqrt{x^2 + y^2 + z^2} = \frac{\partial}{\partial x} (x^2 + y^2 + z^2)^{\frac{1}{2}} \\ &= \frac{1}{2} (x^2 + y^2 + z^2)^{\frac{1}{2}-1} \frac{\partial}{\partial x} (x^2 + y^2 + z^2) \\ &= \frac{1}{2} (x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{1}{2}} (2x) \\ &= \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}} = \frac{x}{r}, \end{aligned}$$

同様に $\frac{\partial r}{\partial y} = \frac{y}{r}$, $\frac{\partial r}{\partial z} = \frac{z}{r}$ が成り立つ. これを用いて,

$$\frac{\partial}{\partial x} \frac{1}{r} = \left(\frac{d}{dr} \frac{1}{r} \right) \frac{\partial r}{\partial x} = \left(-\frac{1}{r^2} \right) \frac{x}{r} = -\frac{x}{r^3}$$

同様に, $\frac{\partial 1}{\partial y r} = -\frac{y}{r^3}$, $\frac{\partial 1}{\partial z r} = -\frac{z}{r^3}$ を得る. 以上により,

$$\begin{aligned} -\vec{\nabla}\phi &= -\begin{pmatrix} \frac{\partial\phi}{\partial x} \\ \frac{\partial\phi}{\partial y} \\ \frac{\partial\phi}{\partial z} \end{pmatrix} = -\begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r} \\ \frac{\partial}{\partial y} \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r} \\ \frac{\partial}{\partial z} \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r} \end{pmatrix} = -\frac{q}{4\pi\epsilon_0} \begin{pmatrix} \frac{\partial 1}{\partial x r} \\ \frac{\partial 1}{\partial y r} \\ \frac{\partial 1}{\partial z r} \end{pmatrix} = -\frac{q}{4\pi\epsilon_0} \begin{pmatrix} -\frac{x}{r^3} \\ -\frac{y}{r^3} \\ -\frac{z}{r^3} \end{pmatrix} \\ &= \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r^3} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \frac{q}{4\pi\epsilon_0 r^3} \vec{r} = \vec{E}. \end{aligned}$$

を得る.

問題 2 以下のコンデンサーの電気容量を求めよ.

(2-1) 平行平板コンデンサー (面積 S , 間隔 d)

$z = 0$ の平板に電荷 $+Q$, $z = d$ の平板に電荷 $-Q$ があるとする. 平板の電荷密度は $\sigma = \frac{Q}{S}$ なので, 平板間の電場は

$$E = \frac{\sigma}{\epsilon_0} = \frac{Q}{\epsilon_0 S}$$

である (第 11 回の演習問題参照).

電場は $z = 0$ の平板から発生し, $z = d$ の平板に向かっている. したがって, $z = 0$ の電位 $\phi(0)$ の方が $z = d$ の電位 $\phi(d)$ よりも高い (正電荷を電場中に置くと, 電位の高い方から低い方へと移動する). その電位差を V とする. すなわち,

$$V = \phi(0) - \phi(d)$$

である.

この電位差は, $q = 1$ のテスト電荷を $z = d$ から $z = 0$ まで電場に逆らって (人間が) 運ぶのに必要な仕事 $W(d \rightarrow 0)$ に等しい (テスト電荷は人間から仕事 $W(d \rightarrow 0)$ をしてもらうことにより, その分ポテンシャルが増加する).

z における電場を $E(z)$ とすると, それに逆らって人間が加えなければならない力は $-E(z)$ である (負符号に注意!).

以上により, 平板間の電位差 V は

$$V = \phi(0) - \phi(d) = W(d \rightarrow 0) = \int_d^0 -E(z) dz = \frac{Qd}{\epsilon_0 S}$$

となる. これを Q について解くと

$$Q = \frac{\epsilon_0 S}{d} V$$

なので、 $Q = CV$ より電気容量 C は

$$C = \frac{\epsilon_0 S}{d}$$

となる。

(2-2) 同心球殻コンデンサー (半径 a, b)

半径 a の球殻に電荷 $+Q$ 、半径 b の球殻に電荷 $-Q$ があるとする ($a < b$ とする)。半径 r ($a < r < b$) の球面 S で半径 a の球殻を包むと、その内部の全電荷量は Q 、 S の表面積は $4\pi r^2$ なので、ガウスの定理より

$$E(r)4\pi r^2 = \frac{Q}{\epsilon_0}$$

が成り立つので、

$$E(r) = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0 r^2}$$

を得る。前問と同じ考え方により、球殻間の電位差は

$$\begin{aligned} V &= \phi(a) - \phi(b) = W(b \rightarrow a) = \int_b^a -E(r)dr \\ &= \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \int_b^a \left(-\frac{dr}{r^2}\right) \\ &= \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left[\frac{1}{r}\right]_b^a \\ &= \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{a} - \frac{1}{b}\right) \\ &= \frac{Q(b-a)}{4\pi\epsilon_0 ab} \end{aligned}$$

なので、 $Q = CV$ より電気容量 C は

$$C = \frac{4\pi\epsilon_0 ab}{b-a}$$

となる。

(2-3) 同軸円筒コンデンサー (半径 a, b , 長さ ℓ)

半径 a の円筒に電荷 $+Q$ 、半径 b の円筒に電荷 $-Q$ があるとする ($a < b$ とする)。半径 r ($a < r < b$) の円筒 S で半径 a の円筒を包むと、その内部の全電荷量は Q 、 S の側面積は $2\pi r\ell$ なので、ガウスの定理より

$$E(r)2\pi r\ell = \frac{Q}{\epsilon_0}$$

が成り立つので、

$$E(r) = \frac{Q}{2\pi\epsilon_0 r\ell}$$

を得る。前問と同じ考え方により、球殻間の電位差は

$$\begin{aligned} V &= \phi(a) - \phi(b) = W(b \rightarrow a) = \int_b^a -E(r)dr \\ &= \frac{Q}{2\pi\epsilon_0\ell} \int_b^a \left(-\frac{dr}{r}\right) \\ &= \frac{Q}{2\pi\epsilon_0\ell} [-\log r]_b^a \\ &= \frac{Q}{2\pi\epsilon_0\ell} \log \frac{b}{a} \end{aligned}$$

なので、 $Q = CV$ より電気容量 C は

$$C = 2\pi\epsilon_0\ell \left(\log \frac{b}{a}\right)^{-1}$$

となる。